

も地域の中心的な役割を果たす上味見生涯教育施設を拠点に活動することは地域で活動する上で重要である。

地域の方にとって一番思い入れが深く、一番なじみのある場所である学校は地域の方が来やすい場所のひとつであり、地域の方との交流を持ちやすい場所であった。また、学校から出て地域で活動するときも、学校で活動していると地域の方の理解が得やすく、廃校だけでなく地域も活用したプログラムが展開できた。

(本章担当；伊藤弘晃)

## 4. 今後の課題

### 4.1. 演劇の創作と自然体験・生活体験とをどのように関連付けるかについての課題

今回、演劇の創作活動とキャンプ・野外調理などの野外教育に重点をおいたプログラム展開となったため、表現力を高めるようなインプロゲームや発声練習といった演劇的な練習・ワークショップの時間がほとんどなく、山・川など地域の自然を活かしたプログラムもあまりできなかった。演劇創作で表現力や想像力を育成でき、自己効力感を高めることができたが、発声やインプロなどの演劇的な練習法を多く取り入れることで、今後の生活に生きてくるスキルを身につけることが出来た。また、自然体験・野外生活体験と演劇創作とがリンクしておらず、それぞれが別々にプログラム展開していく状況で、自然体験と演劇創作を組み合わせた新たなプログラム展開ができなかった。

次回、行うとき、もっと演劇的な練習法を取り入れていくと共に、自然体験と演劇の創作活動をリンクさせ、自然体験で得られた経験を演劇の創作に活かしていけるプログラム開発をしていく事が求められるであろう。また、地域の方や地域の自然などその地域が持つ地域財・めぐり合えた仲間・そして自分とをうまく連携させながら、その時その場でしかできない劇作りを進めていくことで、より深い創作活動になっていくであろうし、仲間とのより強い関係作りができるように感じた。

### 4.2. 地域との交流における課題

今回の演劇創作キャンプでは、「地域に伝わる民話の続きを考えよう」をテーマに行い、地域に伝わる民話を知るために、民話の舞台となっている集落に MTB で行き、その集落に住んでいる方にインタビューを行った。しかしながら、お盆前の平日の昼間ということもあり、多くの方が出掛けており留守の家が多く、どの班も 1 人の方にインタビューするのが精いっぱいであった。また、これ以降も台本の創作及び劇の練習に多くの時間を要し、再び地域の方にインタビューする時間や地域に出掛けて活動する時間が設けられなかった。また、民泊も行ったが、お盆前の忙しい時期ということもあり、泊まらせていただくだけの民泊となってしまった。ババーズの方との交流においても、ババーズの方と参加者が一緒に練習をしたり、昼食をとったりという直接的な交流が今回はもてなかった。

今回、地域の方との交流を多く持てなかったのは、お盆という山村が忙しくなる時期に事業を実施したために、地域の方との時間が合わなかったためであるのと、ババーズの方との事前の打ち合わせや、地域の方への事業実施の事前の連絡が不十分であったためだと考えられる。次回、同様の事業を実施する時には、地域の方が忙しい時期を避けお互いに動きやすい時期に実施することがよいと思われる。また、地域の方や協力してくださる方との信頼関係を築き、地域の方とどのような交流を望んでいるのか、どんな事をしたいのかを明確に伝え、どのような交流の場が設定できるのかを十分に打ち合わせしておく必要があると感じた。

### 4.3. 廃校の活用における課題

当初の計画では、活動拠点を上味見生涯教育施設だけでなく、旧美山町内にあり、上味見生涯教育施設に最も近い廃校である下味見生涯教育施設（旧下味見小学校）もサブの活動拠点として利用しようという計画であった。上味見生涯教育施設と下味見生涯教育施設とを連携させ、それぞれの廃校のある地区の持つ良さ（自然や地理的な良さや、人的な良さ）を活かしながら活動することで、活動の幅が広がり、より充実した活動が展開できると考えていたからである。また、2 つの廃校を活用しながら活動を展開することで、今後の自然体験活動や生活体験活動における廃校の新たな活用の仕方を模索できる点から考えても 2 つの廃校を

活用するもののメリットは大きい。

しかしながら、下味見生涯教育施設移動の問題、日程の問題、その他の事情により、上味見生涯教育施設での実施にとどめることにした。

以上のことを踏まえて、廃校の活用の仕方・利用の仕方を、廃校を利用する民間団体・廃校を抱える地域・行政がいろいろな面から議論する必要性を感じた。

(本章担当；伊藤弘晃)

## 5. 事業評価と今後の展望

本事業について事業評価を行う第 2 回事業検討委員会が平成 21 年 1 月 31 日に行われた。また 2 月 6 日には地域の委員にお集りいただき「展望を語り合う会」をもった。これらの議論に触れながら今回の事業評を行いつつ今後を展望したい。

### 5.1 事業検討委員会での討議と事業評価

#### 廃校で自然体験活動をスタート

まず私たち NPO 法人自然体験共学センターの活動経緯にふれたい。私たちが活動を行っている拠点は、廃校となった旧美山町（現福井市美山地区）の上味見小学校で、現在は福井市上味見生涯教育施設という施設である。美山地区は戦後の国策で杉の植樹が奨励され、育てられてきた。雑木もところどころ残り、熊が里におりてくる年もある。ホタルが乱舞するスポットもあり、水がうまく気温の関係から美味しい米がとれる。源義朝の十男が起源とされる豪族伊自良氏が館を構えた地区であり、その復元館である伊自良の里資料館では歴史がしのばれる。

上味見小学校は、明治政府による学制発布が発令された明治 5 年の翌年に創立され、戦前・後のピーク時は、約 300 名の児童がいたが、年々減少し、ついには 6 人となり平成 13 年 3 月に小学校としての歴史を閉じた。

廃校となった直後の平成 13 年 5 月、私は旧美山町内（平成 18 年 2 月に合併し現在は福井市）の知人の紹介で当時の美山町教育長の前川勝己先生をたずねた。その足で案内されたのが旧上味見小学校であった。廃校と聞いて、木造の校舎をイメージしていたが、少し古い鉄筋の校舎であった。私たち NPO 法人自然体験共学センターは、その年の秋に「北東アジア子ども自然体験交流事業」に取り組もうとその準備に取り組んでいた。10 日間の日程のうち 1 泊 2 日をこの上味見地区・小学校で受け入れていただくこととした。統廃合の結果新設された小学校の子ども達も大勢参加し、中国、韓国、ロシア、モンゴルなどの子ども達と一緒に、畑や山で収穫したもので鍋を作り味わった。餅つき、そば打ち、紙すき、、、。廃校が、その 2 日間は世界の子供達が交わり触れ合う素敵な場となった。この活動を地区の若手、婦人会が総出で準備、運営くださった。その人情味溢れる地区の方々の温かさに感激した。

その後も取り組みを重ねていくなかで、私達の活動拠点を廃校に移す話を前川教育長と少しづつ進めていた矢先の平成 16 年 7 月に福井豪雨が発生、足羽川がいたるところで氾濫し、床下・床上浸水、田畑に泥がたまるなど旧美山町は壊滅状態に陥った。私も災害ボランティアとして手伝い、出来ることで貢献した。ホタルが乱舞した川は、激流で畑やコンクリート堤、堰がえぐられ、破壊され、ズタズタになった。山の荒廃も一因であった。そうした地域に自然体験活動の拠点を構えてよいかー私自身の中でも葛藤し、また仲間たちとも議論を重ねた。

様々な自然があること、現在の里山の置かれている状況、廃校となるような過疎地域を抱えている現状ーこれらを正面から受け止めていくところから出発していこうと覚悟を決めた。行政や地域とも話し合いを重ね、豪雨から半年後の平成 17 年 2 月に、「ふくい森の子自然学校」を開設した。以来、無我夢中で春活動、リーダー講座、夏キャンプ、秋活動、通年活動などに取り組み、5 年目に入ったところである。

地域の様々な方々と出会い、教えていただく中で、自然や生活について様々な知恵や技術を持っておられることを知った。何人もの方々が、私達に、そして子ども達に愛情たっぷりに接し、知っていることを惜しげもなく教えて下さった。「こうした地域の方たちが自然学校の先生として関わって下さる仕組みを作りたい」自然学校の一年の活動の修了式後の懇親会の場で、区長会長をはじめ地域の皆さんを前に協力をお願いした。地域の方々が愛情をもって暮らしてきた地域であり、また学んだ場である廃校に愛着をもっている。きっとその愛情が溢れる学びの場になるに違いない。そのような場で私達や子ども達が学び、次へ引き繋いでいく—そんな自然学校に育てていきたいと思いながら活動に取り組んできた。

### 廃校・地域との関わりについて

このように本事業の活動拠点としたのは、NPO 法人自然体験共学センターが行政・地域との関係性を平成 13 年から築きあげてきた上味見地区、および拠点を構えた上味見生涯教育施設とした。

当時美山町教育長であった前川勝己氏（美山公民館長）は、「統廃合によって廃校になった小学校の活用は、教育委員会としても大きな課題であった。上味見小学校については、NPO 法人自然体験共学センターが活用してくれ、地元住民の協力もあり、公民館としても協力してきた。地域に根付いた活動を年間通じて行うことは、日本でも他に類を見ないことである」とこの 8 年間で振り返った。

上味見小学校校長をつとめた林幸男氏（木ごころ一座座長、劇団ババーズ座長）は、「上味見小学校に 8 年間勤務したことが、今までの教員生活でもっとも思い出となっている。その小学校で活動を続けている NPO 法人自然体験共学センターの活動は大変意味のあることだと感じている」と語った。また、上味見地区に住み、廃校となった当時旧美山町教育委員会委員長の梅田秀彦氏（福井市伊自良の里資料館長）は、「上味見小学校が廃校になってから、村の中に子どもの姿が見えなくなり、地域のお年寄りや地域全体の元気がなくなってきていた。そんな時、NPO 法人自然体験共学センターが廃校での活動をはじめ、村に子どもの声が聞こえるようになったことは、本当に喜ばしいことであった。地域住民は高齢者が多いが、出来るだけこの活動に協力したい」ということであった。伊自良温泉の経営と地域づくりに取り組む伊自良の里振興協会の小林悟理事は、「上味見小学校はかつて村の文化の核となり、300 人の子どもがいた。廃校となって地域もさみしくなっていた。そうした時に NPO 法人自然体験共学センターが廃校にやってきて、元気付けられた」と昔の小学校が果たしていた別な役割に触れた。

地域に学校があることや子ども達がいることの意味合いは、廃校となって初めて実感できることなのかもしれない。残念ながら廃校となってしまったなかで、教育委員会の教育長・委員長、校長・教頭、公民館、地域、保護者、地域作りに関わっている方々のこうした考え・意見から、廃校となった当時は地域がさびしい状況となったこと、NPO 法人自然体験共学センターが子どもの活動を行うなかで活気づいたこと、校長や教師、保護者、地域住民が学校に対して愛着を大変もっていることがうかがえる。

### 今回の事業について

平成 20 年 2 月、文科省の公募事業「青少年体験活動総合プラン」があることを知った。多様な場を生かしていくことを狙いとして「廃校を活用した生活体験事業」というカテゴリーがあった。私たちの場合、廃校を活用しながら行う企画は日常的に取り組んでいるが、その上で地域のよさをより引き出すためにはどうしたらよいか考えてみたところ、

- ① 地域に歴史・文化・自然、人材など多様な教育資源がある（伊自良の里振興協会の hp を参照） <http://www.mitene.or.jp/~ijira/>
  - ② 木ごころ一座・ババーズなど演劇活動が盛んである
- ということなどが浮かび上がってきた。廃校で生活体験をしながら演劇など創作活動に取り組むという企画「廃校を活用した生活体験と演劇創作事業」を立案し、申請したところ、採択を受け、本事業を実施することができることになった。

企画を担当した伊藤君は、「演劇キャンプにおいて、地域の協力は不可欠であった。林先生が座長をつとめている劇団『ババーズ』との交流はとても大きな意味を持っていた。地域にとってもっとも思い入れが深く、なじみのある上味見小学校は、活動拠点として、とても適していた。地域の方との交流をもちやすい場所であった」と振り返った。

事業実施にあたり特にご指導いただいたのは劇団ババーズの林座長、小林振興協会理事であった。林座長は「演劇は表現活動である。人間の本能的・基本的な欲求（叫ぶ・歌う・踊る）に応えるために演劇がある。普段では出来ないようなこと（叫ぶなど）を、このような形で行えることはよい。脚本があり、それを現実のものにするという作業。これは総合芸術といい装置を作ること・脚本を作ること、様々な要素が含まれている。上味見の民話の続きを考えるということを楽しくやっていたよかったです」と評価くださった。

小林理事は「劇の発表を廃校（旧上味見小学校）以外のところで行うことを強く要望した。廃校という限られた空間では、観客も限られてしまうからである。伊自良温泉の座敷で発表することになった。民話の創作内容に関して、地元からみると考えられないような、自由な展開が多く、地元住民の反応が心配だったが、会場には人が多く入った。芝居がお客さんに「ウケた」ことが、子ども達にとっても心に残る、よい体験が出来たのではないだろうか？ お盆の時期でもあり、伊自良の里振興協会として一緒に開催した。長く開催されていなかった盆踊りを子ども達と行えたことは、地元としてはうれしいことだった。天候が心配だったが、開催時は晴れ、予想以上によい行事となった。」と地域の立場からの評価をいただいた。

前川館長は、「スタッフが舞台機材を借りたいと公民館・文化ホールにきたが、発表の会場である伊自良温泉の座敷は文化ホールほど広くはなく、機材が適当かどうか心配であったが、うまく考えて設置していた。子ども達もよくシナリオを作られた。自由な発想と創作する力がよく発揮されていてとてもよかった」と指摘いただいた。

橋本正実氏（福井県教育庁生涯学習課参事）は、「事業の募集対象について、地元の参加者を募集した方がよいのでは？ 都会の子どもがやってきて、演劇をするのか？ と心配していた。事業後の新聞記事を拝見し、大成功だったと感じた。今後は、演劇の創作と野外活動のリンクをどうしていくのかということが課題になってくると思う。演劇創作を行うことが、自然体験の中で必然性を持つことが重要である。それらをプ

プログラム化できれば、全国的に見ても、類を見ない事例になるのではないだろうか。地域の特色と関連させながら、活動できることも大きいと感じる。今回の参加者が、平成 22 年度にもリピーターとして参加してくれれば素晴らしい」と評価と課題を指摘いただいた。

今回の事業の特徴として、以下の 4 点があげられるであろう。

- ① 廃校という場を生活の拠点としたこと
- ③ 地域の様々な場・教育資源を活用したこと・協力いただけたこと
 

地域の歴史を学ぶことができる伊自良資料館をはじめ、樺八幡神社、飯降山、上味見の自然・文化はそのまま学習資源・教育資源になることを改めて感じた。元小学校関係者、劇団「ババーズ」の方々の協力も大変大きかった。逆に言えば、地域の自然・文化・歴史そして、人材に触れた教育プログラムを実施できる要素が十分にある地域であるということが改めてわかった。

NPO 法人だけが頑張っていてもうまくいかず、地域や行政の協力が不可欠と感じている。
- ③ 企画・参加する側に魅力を感じさせるものが上味見地域にあり、そうした取り組みを進めることに対して温かい目で見守る度量の深さがあること
- ④ 地域の伝統を生かしながら自由な発想と創作意欲を引き出すことができたこと

日本でも廃校が増えているなかで廃校を活用した体験活動についてさまざまな事例がある。自治体と NPO 法人が協働し、自治体が予算をつけて観光資源にしたり地域活性化の活動を行っている事例もある。上味見や美山で今回取り組んだことは、廃校活用方法としての美山版として全国に発信していけるものだと感じている。

### 美山・上味見地区の教育資源・廃校を活用した連携型自然体験活動・演劇創作活動の展望について

地域との関わりについて、小林理事からは次のようなアドバイスがあった。「長期的に地域と関わることで、田植えや畑の作物の収穫など、少しずつ年間を通して行うほうが、アイディアのふくらみも違うのではないかと。今まで NPO 法人自然体験共学センターの活動に対して受身だったと、最近感じている。昔は、わが子が生徒でなくても地域の大人が PTA 準会員などで、小学校に関わっていた。

NPO 法人自然体験共学センターの活動を、地域の人々にもしってもらうために、時には学校新聞などを発刊するとよいと思う。地域と団体が今まで独立していたが、これからは地域全体として、団体とどう協力するかを具体的に話し合う場を設けることが必要だと思う。楽しみにしている部分が多い」

また林座長よりは「38 年の教師生活で、自分のやりたいことのために、地域と一緒に活動できた上味見小学校の思い出は大きい。上味見は本当に地域の協力がすごい。ババーズの団員たちも、どんどん主体的に動くようになっていく。演劇は見守ることの大切さを感じた。

美山バスツアーなど上味見の自然を生かしたユニークな活動を計画している。マスコミなどを活用して、ユニークな活動があることをアピールすれば人は集まる。学校関係者も動きやすいのではないだろうか？ まだまだこの事業は発展する可能性があると思う」と強く激励いただいた。

本事業を企画、実施してきたなかで、今後深めていくということが強く意識されたことは次のとおりである。

- 1) 上味見の廃校や様々な地域の教育資源を活用した自然体験活動の企画・運営
- 2) 廃校や様々な地域の教育資源を活用した長期自然体験活動の支援・推進
- 3) 演劇創作と自然体験（生活体験）を組み合わせた活動の企画・運営

地域の方々にご理解・ご協力をいただきながら、この地域で出来ることを積み重ねていきたいと考えている。そして発信していくことで一つのモデルを全国に提示し他の地域の廃校の活用と活性化に貢献できればと思う。

(本項担当：辻 一憲)

## 5.2 展望を語りあう会での意見交換

### 美山地区のこれまでと現状

日本国内の限界集落と呼ばれる集落の数は、年々増加の一途をたどっている。最近では集落保存のために、古民家改修工事などに、都会からの参加者を募り、農業体験や田舎暮らしを体験させるツアーなどもよく耳にする。メディアはそのたびに、地域活性化のための活動について大きく取り上げることがある。今回行った演劇キャンプの活動では、地元新聞社はもとより、全国紙からも取材を受ける機会が多くあった。

なぜこれほど、この活動が注目を集めることとなったのだろうか。約 1 週間、都市部の子ども達が田舎地域を訪れ、自然の中での協同生活や、地域の調査・それらの情報を元に、オリジナルの芝居を創作し、地元住民が集まる場所で上演をする。この活動内容に独創性を感じ、メディアが注目をしたのだとも考えられる。しかしそれ以上に注目すべき点は、活動の背景にある「地域」の存在である。活動場所である上味見地区の昔からの地域性と、外からの来訪者に対する柔軟な対応力・適応力の存在がこの活動の成功には不可欠であった。これは、活動中の「民話調べ」での地域調査や、劇団「ババーズ」との交流体験でも、大きくその存在を感じた。そこで、演劇キャンプの活動を終え、改めて、上味見地区におけるこれまでの地域性や、文化の力を用いた地域活性化政策について振り返ってみようと思う。

かつて美山地区では、地域間の交流を目的とした「盆踊り」や「お正月」の行事が盛んに行われていた。行事は美山地域内の各集落で行われ、集落に住む若者同士の社交の場でもあった。上味見地区は、福井県内で減少の傾向のあった「盆踊り」が近代まで行われていた数少ない集落である。「盆踊り」に関する諸準備・実行にいたるまで、地域の青年団が実行役として運営を行っていた。彼らは長年にわたり、祭りに限らず地域の行事の中心であり、また下支えの役割を担ってきた。戦後には、各地の青年団が芝居活動などを盛んに行う姿も見受けられた。そんな中、20 年ほど前から青年団の力が衰退を見せ始めた。上味見地区でも、住民の大半が中・高年～高齢者という状況へと変化していった。そんな状況の中、青年団に変わる存在が有志のメンバーで結成されることとなる。その組織を「愛

郷会」といい、現在まで様々な行事を企画・運営し、上味見地区内で積極的に活動している。共学センターとの関わりも、2004年頃を始めに次第に大きくなっていった。上味見地区を治めていた豪族伊自良氏にちなんだ「伊自良祭り」を始まりに、上味見地域内での活動が多くなっていった。その後平成9年には、美山木ごころ文化ホールが建てられた。さらに、文化ホール初代館長の文化活動への関心と、住民との協働により、「木ごころ一座」を旗揚げした。県内外から注目を集め、現在もさかんに公演が行われている。この活動には、住民のふるさとへの思いを、地域外へと発信するという役割もある。「上味見のよさを見つけて、ふるさとを学ぶ、良いところを伝えたい。」住民からはこんな言葉がでた。

今現在の上味見における、青年層の集まり方・活動のあり方は、少しずつ変化している。2004年より、共学センターが活動を開始し、現在まで多くのボランティアの大学生や子ども達が、上味見を訪れるようになった。年間を通じた地域行事への、ボランティアの大学生の姿も見られるようになった。この様子を、地域の人々は「現代における青年団」という人もいる。イベントや行事は、その時上味見を訪れた大学生や、子どもたちによって、毎年、様々に変化している。このことから、上味見地域が、古い慣習や考えに縛られない、柔軟な姿勢をもった地域であることが読み取れる。

#### 2008年演劇キャンプの活動の検証

情報ツールの発達により、現代社会における子どもたちの抱える問題は深刻な状況になっている。子ども達にとっての一番のコミュニケーションの手段は、メールと電話である。メールでメッセージを交換すれば、友人となり、電話で話すことは、直接会話したことと同じ意味となる。子どもたちが生活の中で、直接コミュニケーションをする場所は、学校内と家庭程度になっている。また、メール文章を入力するために思考する時間が増えることで、顔の見えない相手について、考えを巡らせるうちに、不安感や怠惰な気持ちが芽生えることもある。それらのことが、子どもたちを、直接的な行動から遠ざける要因にもなっている。今回の演劇キャンプのテーマには「自分の思いを発信しよう！」というものがあつた。

演劇というツールを用いて、考え込まずに人とコミュニケーションできる機会や、すぐに実行・行動することができる機会ができた。このことで、子どもたちの表現も、こちらが想定する以上に自由なものとなった。創作劇という内容に、多少の不安もあつたが、子どもたちは自由に創作を楽しんでいた。劇作りの作業や、生活体験の中での、コミュニケーションの実践によって、これらは可能になったのだと考えられる。

また地域にとっては、普段生活している地域の別の一面を見る機会になり、驚きや発見もあつた。また、劇の発表を地域住民が多く利用する「伊自良温泉」で行い、時期もお盆ということもあり、盆踊りも開催され、盛大な発表公演となった。

こうして、地元住民だけの企画よりも、外部から多面的に地域をみることで、地元住民は地域の新たな一面を認識し、さらに地域愛を深め、地域のよさを外へと発信したいという思いも強くなったのではないかと思われる。

こうした中で今後は、演劇キャンプは地域にとって、そして現代社会の中で、どのような役割を担っていくのだろうか？

#### 演劇キャンプの今後の展望

自然体験活動と、演劇の創作活動の二つを実施するという今回の試みは、新しい地域活動のモデルのひとつとなる可能性を秘めている。生活体験で、得た知識や感覚、感情など

を、演劇というツールを使って、他者へ表現すること。これは、普段われわれが生活する上でも、重要なことだと思われる。この事例が、上味見地域のみならず、全国的に、実施されることを願っている。参加する子どもたちにとっては、素直に自分自身を表現する場であり、人と関わることの大切さ、その難しさと楽しさを感じる場になってほしい。また、地域住民にとっては、普段生活している場所にたいする発見の場になり、さらにこの地域への愛情、外へと発信していく機会になってほしいと思う。

この活動は、今後も継続し、子どもたちの成長とともに地域住民とのかかわりも深くなることを願う。また、多様な文化との交流と、そこから生まれる新たな表現・発見の共有活動を、別の地域でも行っていければと思う。今回の美山についてのお芝居を元に、他の地域との交流手段の一つとして用いることも可能になるかもしれない。

また、子どもたちは地域にかかわる大人の姿や、実際に自身が地域にかかわることを通じて、自分たちの普段住んでいる地域についての関心が、生まれるかもしれない。その関心が、身近な人々からやがては、日本全国へ広がり、世界に対する関心へと広がっていくことが、現在時点での演劇キャンプの目標である。

(本項担当：濱見 彰映)

